

平成14年度病害虫発生予報 第1号（4月予報）

平成14年3月25日
青 森 県

【 概 要 】

りんごでは病害虫の発生時期は早く、南部地域でリンゴハダニがやや多いと予想される。

1 予報の内容

（ 1 ） 水 稲

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
苗立枯病 (ピシウム・フザリウム)	県内全域	-	平 年 並	4月の気温は平年並の見込みである。 フザリウム属菌やピシウム属菌に対する効果の高い剤による防除の徹底が見込まれる。
苗立枯病 (ごま葉枯病)	県内全域	-	やや少ない	前年の収穫期におけるごま葉枯病の発生量がやや少なかった。 4月の気温は平年並の見込みである。
苗立枯病 (籾枯細菌) (苗立枯細菌)	県内全域	-	平 年 並	前年の発生が平年並であった。 前年の出穂期が低温であったため、感染が少ないと考えられる。
ば か 苗 病	県内全域	-	平 年 並	前年の本田における発生量が平年並であった。 効果が高い剤による種子消毒の徹底が見込まれる。

その他の病害虫

苗いもち：種子消毒はほぼ100%実施されると見込まれるが、前年の穂いもち発生量が多かったため、罹病わら、籾殻、種籾などの伝染源が例年より多いと予想される。

気象の根拠は3月20日発表の3か月予報による。

（ 2 ） りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
モニリア病 (葉腐れ)	県内全域	やや早い	やや少ない	前年の実腐れの発生が平年並であった。 消雪が早く地表面の乾燥が進んでいる。 3月の気温が高かく、発芽がやや早いと予想される。 向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並の見込みである。

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
腐 ら ん 病 (枝腐らん)	県内全域	-	平年並	3月の発生量はやや多かったが、暖冬のため病斑の発現が早まったと思われる。
リンゴコカク モンハマキ	県内全域	やや早い (芽への 食入)	平年並	越冬幼虫量が平年並であった。 3月の気温が高く、発芽がやや早いと予想される。 向こう1か月の気温も平年並から高い見込みである。
リンゴモンハ マキ	南部地域	やや早い (芽への 食入)	平年並	越冬幼虫量が平年並であった。 3月の気温は高く、発芽がやや早いと予想される。 向こう1か月の気温も平年並から高い見込みである。
キンモンホソ ガ	津軽地域	やや早い	やや少ない	前年秋の発生量がやや少なかった。(津軽地域) 前年秋の発生量が平年に比べ少なかった。(南部地域) 3月の気温は高く、発芽がやや早いと予想される。 向こう1か月の気温も平年並から高い見込みである。
	南部地域		少ない	
リンゴハダニ	津軽地域	やや早い (越冬卵の ふ化)	平年並	越冬卵量が平年並であった。 (津軽地域) 越冬卵量は平年に比べやや多く、一部で多発園も見られた。 (南部地域) 3月の気温は高く、発芽がやや早いと予想される。 向こう1か月の気温も平年並から高い見込みである。
	南部地域		やや多い	

気象の根拠は3月22日発表の1か月予報による。

(3) 野菜

病 害 虫 名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(にんにく) 春 腐 病	県内全域	-	平年並	向こう1ヶ月の気温は平年並から高く、降水量は平年並の見込みである。

気象の根拠は3月22日発表の1か月予報による。

1 防除のポイント

(1) 水 稲

《 3 ～ 4 月の防除作業 》

3 月		4 月				
5 半 旬	6 半 旬	1 半 旬	2 半 旬	3 半 旬	4 半 旬	5 半 旬
塩水選 / 浸 種		種 / 催 芽・播 種 / 出芽・緑化 / 硬 化				

種子消毒

ガリウム・ピシウム属菌による苗立枯病防除

リゾープス属菌
細菌性苗立枯病菌による苗立枯病防除

イネドロオイムシ 防除（床土混和・播種時処理）
イネミズゾウムシ

いもち病（播種時処理）

いもち病（緑化期処理）

イネドロオイムシ

イネミズゾウムシ

注： 印は必ず防除する。

印は前年の発生状況及び品種に応じて防除する。

【 種 籾 の 準 備 】

自家産の籾を種籾として使用する場合は、いもち病、ばか苗病やごま葉枯病、籾枯細菌病等が発生しなかったほ場産の籾を使用する。

【 塩 水 選 】

塩水選は充実した籾を選別するばかりではなく、いもち病、ばか苗病やごま葉枯病等に感染した籾を除去するためにも重要な作業であることから必ず実施する。

塩水の濃度は基準を守り、丁寧に実施するとともに、塩水選後は十分水洗いする。

【 種 子 消 毒 】

塩水選後浸種前に、次の表のいずれかで種子消毒を行う。

薬液の量は、種籾と同じかそれ以上の容量とし、種籾が薬液から出ないようにする。

薬液に浸漬して消毒する場合は、薬液の温度が10 以下のような低温になると防除効果が低下する傾向があるので、液温があまり低くならないように屋内で行う。

低濃度長時間浸漬で消毒する場合は、浸漬中に2～3回薬液をよく攪拌する。

高濃度短時間浸漬で消毒する場合は、網袋に入れた籾に薬液がよく付着するように網袋をよくゆする。

生割れ以上の種籾を消毒すると、生育遅延等の薬害を生ずるので行わない。

種 子 消 毒 剤 の 防 除 対 象 病 害 一 覧 表

農 薬 名	処 理 方 法	風 乾	対 象 病 害 虫				
			ばか苗病	いもち病	ごま葉枯病	もみ枯細菌病	苗立枯細菌病
ヘルシード水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
ヘルシード乳剤	20倍、10分間 200倍、24時間						
ヘルシード T水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
ヘルシード Tフロアブル	20倍、10分間 200倍、24時間						

農 薬 名	処 理 方 法	風 乾	対 象 病 害 虫				
			ばか 苗病	いもち 病	ごま 葉枯 病	もみ 枯細菌 病	苗立 枯細菌 病
ケ ス 水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
テクリードC	20倍、10分間						
フロアブル	200倍、24時間						
トリフミン水和剤	30倍、10分間 0.5%、粉衣						
トリフミン乳剤	30倍、10分間 300倍、24時間 5～10倍、3%塗沫						
スボルタック乳剤	100倍、10分間 1000倍、24時間						
スターナ水和剤	20倍、10分間 0.5%、粉衣 200倍、24時間						
トリフミン スターナSE	20倍、10分間 200倍、24時間 7.5倍、3%塗沫						
モミガードC 水和剤	0.5%、粉衣 200倍、24時間 7.5倍、3%塗沫						

注) スターナ水和剤は、ばか苗病、いもち病等の防除剤との混用で使用する。
風乾欄に 印のある農薬を使用する場合は必ず風乾する。

【 浸 種 】

浸種時の水の量は、種籾の2倍かそれ以上の容量とする。

浸種中の水温が低いと消毒の効果が低下する傾向があるので、水温は10℃以下にならないようにする。

消毒後の浸種は流水を避け、水の交換は初めの2日間を行わない。その後は3日に1回程度、静かに換水する。

【 催 芽 】

催芽の際に使用するわら類は、70℃以上の湯に20分間浸漬して消毒する。

循環式催芽機(ハト胸催芽機)は細菌の増殖を促進することがあるので消毒等には使用しない。

注意すべき事項

消毒後の種籾は、魚介類に強い影響を及ぼす薬剤もあるので、河川・湖沼・ため池等で浸種しない。また、残液や器具の洗浄液がこれらの水系に流入しないようにする。

消毒した種籾は、食用や家畜の飼料としない。

薬剤処理は素手で行わない。

【 フザリウム・ビシウム属菌による苗立枯病の防除 】

土壌のpHを5.0前後に矯正する。

播種前に次のいずれかの方法で薬剤処理する。

タチガレース粉剤を育苗箱1箱当たり8gの割合で床土に均一に混和する。

タチガレース液剤の500～1000倍液を、育苗箱に床土を詰めかん水してから、箱当たり500mlの割合でかん注する。

育苗中の温度管理を徹底する。また、過湿にならないように注意し、健苗育成に努める。

【 リゾープス属菌による苗立枯病の防除 】

育苗箱等の育苗資材は、十分水洗いしたものを使用する。

傷朶の混入が多いと多発しやすいので、傷朶の混入が多い朶は、種朶として使用しない。
厚播きすると発生が多くなるので、基準播種量を守る。

播種前につぎのいずれかの方法で薬剤処理する。

播種5日前～播種時に、ダコニール粉剤を箱当たり15～20gの割合で床土に均一に混和する。

育苗箱に土を詰め、かん水してからダコニール1000の500倍液を箱当たり500?の割合でかん注する。

なお、いずれの場合もタチガレエース剤と併用または混用ができるが、ダコニール粉剤とタチガレエース粉剤との併用では初期生育を抑制することがあるので、基準薬量を厳守する。

また、ダコニール粉剤は、砂質土壌では初期生育の抑制等の薬害を生じることがあるので使用しない。

高温、過湿で多発するので注意する。特に、播種～出芽期の温度は30～32℃以上、緑化～1.5葉期の温度は30℃以上にならないよう注意する。

【 ごま葉枯病菌による苗立枯病の防除 】

種子消毒のほか、次のことにも注意する。

種朶等が露出していると二次感染が多くなるので、覆土は十分に行う。

育苗時の高温・過湿は発病を助長するので、適正な育苗管理に努める。

【 もみ枯細菌病・苗立枯細菌病菌による苗立枯病の防除 】

前述の[種子消毒]あるいは、次のいずれかで行う。

播種時に次のいずれかの方法で薬剤処理する。

播種前に、カスミン粒剤を育苗箱1箱当たり30gの割合で床土に均一に混和する。

播種後覆土前にカスミン粒剤を育苗箱1箱当たり15～20gを、播種した種朶の上から均一に散粒する。

カスミン液剤の4～8倍液を育苗箱1箱当たり50?を播種した種朶の上から均一に散布する。

育苗中の温度管理を徹底する。特に高温、過湿にならないように注意し、健苗育成に努める。

【 播種時または緑化期におけるいもち病の防除 】

前年発生の多かったほ場や抵抗性「中」以下の品種を使用する場合、次のいずれかの薬剤処理により、本田での予防防除を省略できる。

播種時（覆土前）に、デラウス粒剤、デラウスプリンス粒剤またはウイン箱粒剤を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

緑化期に、デラウス粒剤、ウイン箱粒剤またはDr.オリゼプリンス粒剤を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

【 播種前～緑化期におけるイネドロオイムシ、イネミズソウムシの防除 】

例年発生が多いほ場や本田での防除が労力的に難しい場合には、つぎのいずれかの方法で薬剤処理する。

床土用の土にパダン粒剤4を育苗箱1箱当たり80g、またはプリンス粒剤を育苗箱1箱当たり50gの割合混和する。

播種時（覆土前）に、プリンス粒剤を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

緑化期に、Dr.オリゼプリンス粒剤6を育苗箱1箱当たり50gを均一に散布する。

ただしパダン粒剤4は、薬害（苗の白化・葉先枯れ・巻葉）を生ずるので覆土には混和しない。また、床土の種類によっても薬害を生じることがあるので、火山灰性の畑土や山土（りん酸吸収係数2000以上）、砂土など有機物の少ない土壌では使用しない。

プリンス粒剤は低温で生育抑制を生じる恐れがあるので温度管理に注意する。

【 苗代におけるケラの防除 】

〔播種前〕 耕起、整地して置床を作ってから、ダイアジノン粒剤5を10㎡当たり60gの割合で置床とその周辺に均一に散布する。

【 苗代におけるキリウジガガンボの防除 】

〔播種前〕 耕起、整地して置床を作ってから、バイジット乳剤1000倍液を、苗床 1 m²当たり 300～500g 散布する。

（ 2 ） りんご

【 モニリア病 】

園地の排水に努め、地表の乾燥を図る。さらに剪定枝の整理などの作業を速やかに行い、薬剤散布が順調に行えるようにする。

「芽出し当時」は防除上最も重要な時期なので、薬剤散布は遅れないように必ず行う。
葉腐れは見つけ次第摘み取って処分する。

【 腐らん病 】

薬剤だけに頼ることなく、常時園内を見回り早期発見、早期治療を行う。

発芽前の粗皮削りは必ず行う。

剪定後の切口にはできるだけその日のうちにバッチレート塗る。

芽出し当時の薬剤散布は遅れないように必ず行い、枝幹部に十分付着するように散布する。

胴腐らんは見付け次第泥巻きを行うか、削り取って塗布剤を塗る。トップジンMオイルペーストは薬剤耐性の懸念があるため、再発した場合は、泥巻きを行うか、他の塗布剤を塗る。

【 ハマキムシ類 】

芽出し10日後にハマキムシ類防除剤を加用する。

リンゴコカクモンハマキにはダズバン水和剤、トクチオン水和剤のいずれかの防除薬剤を使用する。

リンゴモンハマキにはスミチオン水和剤、ダズバン水和剤、トクチオン水和剤、エルサン水和剤、ミクロデナポン水和剤、スプラサイド水和剤のいずれかの防除薬剤を使用する。
この時期のピレスロイド剤散布は訪花昆虫への影響が懸念されるので絶対に使用しない。

【 キンモンホソガ 】

発生が多い場合は、芽出し10日後に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー水和剤、モスピラン水溶剤のいずれかの防除剤を加用する。

【 リンゴハダニ 】

越冬卵を殺卵するため、芽出し当時のマシン油乳剤の散布は遅れないように必ず行う。

（ 3 ） 野菜

にんにく

【 春腐病 】

消雪後の腐敗株は伝染源となることがあるので、抜き取りを徹底する。

抜き取り後、新たに発生が認められた場合、7日おきくらいに薬剤散布を数回実施する。

窒素過多等で生育が旺盛なほ場では多発する傾向があるので、降雨が続くような場合には予防散布を実施する。

排水性の良くないほ場では、滞水しないよう、排水に努める。

4月の病害虫テレフォン情報案内

〔津 軽 地 域〕 電 話 0 1 7 2 (5 3) 0 0 3 3

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
3	下	水稻の種子消毒		
4	上	4月病害虫発生予報について		
	中	苗立枯病と育苗管理	モニリア病とリンゴハダニの防除	
	下	苗立枯病と育苗管理	モニリア病とハマキムシ防除	

〔南 部 地 域〕 電 話 0 1 7 6 (2 4) 0 0 8 8

月	旬	水 稻	果 樹	畑作・野菜
3	下	種籾消毒と育苗期の防除	リンゴ腐らん病の防除	
4	上	4月病害虫発生予報について		
	中		りんご芽出し当時の防除	にんにく春腐病防除
	下	苗立枯病の防除対策	りんご芽出し10日後の防除	ながいも根腐病の防除対策

なお、テレフォン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。

予察情報及びテレフォン情報は、アップルネット（県農林水産部による農業情報サービスネットワーク）にも掲載されています。

〔 U R L 〕 <http://apple.net.pref.aomori.jp/>

病害虫に関する問合せ先

	電 話	F a x
青森県農業試験場病害虫防除室	0172(52)9500	0172(53)3717
青森県畑作園芸試験場病害虫防除室	0176(53)7171	0176(53)8934
青森県りんご試験場病虫肥料部	0172(53)6132	0172(52)5934
青森県りんご試験場県南果樹研究センター	0178(62)4111	0178(62)4114
フラワーセンター21あおもり生産技術部	017(728)8721	017(728)8727